

待て早まるな！その能力は地雷だ！！！！

有限世界

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪魔：カミは凄い能力を与えるって言ってたけどさあ。ちゃんと考えて選べよ。その能力は冷静に考えたら地雷だから。だからこっちの一見シヨボそうな効果にしとけて。な？

目次

時の能力	
時を止めるだけの能力	1
過去に戻るだけの能力	4
異世界での注意事項	
人間にはあり得ない魔法の才能	6
手で触れた物質を破壊する能力（タイミング任意）	10
あらゆるダメージを一瞬で回復し続ける能力	13
番外編	
番外編	16

時の能力

時を止めるだけの能力

俺には超能力がある。時間を停止するという強力無比な能力だ。H A H A H A、凄いだろう。制限とか特に無くて何時でも何処でも発動できて何時までも続けられるんだぜ。

カミ：そんな能力をあげたカミ様凄い！

悪魔：嘘でないだけに腹が立つな。

さて、みんなも考えて欲しい。そんな凄い能力があつたら何ができるのか。

色々考えれる事はあるだろう。ピンチから逃げるとかエロい事に使うとかヒーローになるとか色々考えましたよこの超能力をもらった時。

さて、俺はそんな能力を今使ってる。そして先の問題にこう答えよう。

正解は『何もできない』だコンチクショウ！

悪魔：だから言ったのに。

全てが止まった世界、すなわち俺も止まった世界！そこで何をどうせいっちゅうんじゃー！対象くらい制限つけろや！自分除くとか！

カミ：別にそれでも良いですよ。

悪魔：止めてやれ、もつと悲惨な目に遭う。だいたい自分だけ動いても空気と服が邪魔で動けんがな。あと光も動かないから何も見えな

いし。

カミ：何も見えないといえば透明になる能力もありますね。
悪魔：網膜も透明になって何も見えなくなるんだよな、あれ。音は聞こえるし触れるから便利っちゃ便利だが。

今、目の前で俺を右腕で殴りかかろうとするヤンキーに時を止めて

対抗した俺！しかし動けない！殴られると神はおっしやいますか!!

カミ：その能力を選んだのは貴方です。

悪魔：そして忠告を聞かなかったのもお前だ。

いや、一応考える事はできるがそれで何をしろと？

カミ：そうしないと戻せない事になるのと、貴方が時を止めたと証明できなくなります。

言っててなんだが、そんなに頭が良いわけでもないぞ。能力を使ったところで頭がいい奴なら一瞬で解ける問題も解けないんだぞ。

カミ：時を止める能力は賢い人向けですからねえ。

悪魔：賢いならもっと便利な能力選ぶに決まってるだろうが。

とりあえず時を少しだけ流しながら後ろに跳びずさる。そして空中で時を止めた！さてヤンキーは……

ちよ!! 右はフェイントで更に踏み込んで左でくるだど!! いや、俺が避けようとした事に気がついて攻撃方法を変えたのか!!

悪魔：このヤンキーは素直に忠告を聞いてくれたからな。

カミ：動体視力を任意に上げられる能力ですね。

ここからガード！時を戻す！そしてすぐに止める!!!

駄目だガードが間に合わない!! どうしよどうしよどないしよ!!

痛い嫌だ痛の嫌だ、けど時を進めたら痛いよ。

神：ふむ。今度は痛みを感じない能力を渡しましょう。ダメージを負わない能力も良いですね。

悪魔：前のは単なる病気で後ろのは地雷じゃねえか。

そうだ！このまま時を止めていたら一生殴られない！俺天才！

カミ：W W W

悪魔：ア・ホ・かー!!!

フハハハハ、お前の拳なぞ当たらん！

こうして1つの世界は時を止めた。

再び動き始める事は2度と無いであろう。

悪魔：どうするつもりだ？

カミ：どうしましようかねえ？

悪魔：なんちゆう無責任な。

過去に戻るだけの能力

「あー、負けた負けた」

ヤバいなー、競馬で全財産すったもんなんー。ヤバいなー。どうしよう。

カミ：どうしよー

けど大丈夫、こんな時には過去に戻る能力！

カミ：パチパチパチパチ

この能力で過去に戻って当ててやれば大金持ち！

悪魔：それなら最初から予知能力で良かっただろ、地雷だが。

カミ：フッフ悪魔さんはわかっていませんね。馬券を持って当たるか当たらないか周囲の大勢とともに熱中するあの感動こそが大事なのですよ。

悪魔：さようけ。

「ターイムリープ！」

悪魔：あのセリフは必要なのか？周りにいた人は彼が急に消えて驚いているぞ。

カミ：能力を選ばせただけですから。奇声をあげたのも奇妙な運命に巻き込まれるのも、全て自己責任ですよ。

ほーほっほっほー！

悪魔：なんちゅう笑い声やねん。

カミ：ほーほっほっほー！

悪魔：お前もかい。あと、笑い声はあいつのは心の声だからな。口から出てないからな。

馬券を買う前に戻って来たぞ！さあ当たり馬券を買うぞ！全財産を突っ込んで、ボタンをポチ……チゲーよ！1つ右だ右！それさつき選んだやつ！

「まあ適当でいいか。どうせ過去に戻るし」

そう思ったよそう思いました！けど今は思っていないし何で過去と同じ行動とセリフを繰り返してるんだ!!

悪魔：過去に戻るだけの能力ならこうなるわなあ。戻るだけで変える訳じゃねえもの。

カミ：過去を変えるなど許されるはずがありません。今を必死で生きている者に対する冒涇です。なので、同じ過去（過ち）を繰り返してください。

悪魔：能力を与えた人間を玩（もてあそ）ぶのは冒涇でないとでも？

カミ：選んだのは彼等ですよ。私は何も悪くない。

「あゝ、負けた負けた」

ヤバい。ここまで過去に自分がやった行動と全く同じだ。あ、ああ、これからどうしよう？全財産すつてもうた。

カミ：どうしょー

「タイムリープ！」

これで終わ……

何で馬券を買う寸前に戻ってるんですかね!!

カミ：過去に戻ったからです。

「まあ適当でいいか。どうせ過去に戻れるし」

「あゝ、負けた負けた」

「タイムリープ！」

「まあ適当でいいか。どうせ過去に戻れるし」

「あゝ、負けた負けた」

「タイムリープ！」

「まあ適当でいいか。どうせ過去に戻れるし」

「あゝ、負けた負けた」

「タイムリープ！」

悪魔：なあ、ループ一回で良かったんじゃないか？エントロピー回収的な意味で。

カミ：何を言っているんですか悪魔さん。そんな事したら使える能力に早変わりするじゃないですか。

悪魔：端（はな）から与えるなよ、んな使えない能力。

異世界での注意事項

人間にはあり得ない魔法の才能

悪魔：カミさんカミさん、何で今回は異世界転生なんてさせたんだ？

カミ：それは面白いからに決まっていますよ、悪魔さん。

悪魔：そして地雷を踏ませるのな。

カミ：今回ののは解りやすいですよ。

悪魔：嘘こけ。今回設定した世界でならではをひっそりと混ぜてるんじゃないか。まあ地雷だから踏み抜かなければ問題ないが。

唐突だが俺、わたりせ渡瀬 戒かいはいわゆる異世界転生を果たした。よくある

チート能力については此方からくれと言ったものをくれる訳ではなかった。神いわく、私のミスではないから、とのこと。

カミ：だから私は悪くありません。

悪魔：そういえば、あの世界の人間には全員『神のルールから外れる能力』と『神のルールから外れる能力を伝播させる能力』を与えてたんだっけ？

カミ：ええ。私がかきm……引つk……制御しなかったらどのようなかというモデルケースとして作ってみた世界です。なので彼の運命については私は干渉できません。死後は別ですが。

悪魔：他の世界はかき乱して引つ掻き回している自覚あんのな。つうか現に今かき乱して引つ掻き回しているもんな。

じゃあ何故俺が異世界転生できたのかと訊ねたら、死因が素晴らしく神が感動したかららしい。まあ死因についてはここでは秘密にしよう。言いふらすものでもないし。

カミ：大食い大会に備えて断食してたら大会が延期になって、そのまま飢え死にしたことは流石に本人の口からは言えませんがね。

悪魔：バラしてやるなよ。あと、そこまで衰弱していたら、大食い大会に参加しても胃袋が受け付けないんだがな。

此方から能力の指定はできなかったものの、素晴らしい死因に感動してか、幾つかの能力の中から神は選ばせて貰う事になった。

カミ：涙が出るほど感動爆笑しました。

悪魔：心を強く動かす事を感動というから、爆笑するほど心が踊ったなら間違いでは無いのがム力つくなあ。

地雷な能力もありそうだったが（常に瞬間回復とかあらゆるダメージを受けないとか）、自分の意思でオンオフ切り替えられる能力なら問題ないだろう。

悪魔：そういう意味では正解だな。どちらかと言うとダメージを受けない方がヤバいが。人間の体のシステムでダメージを受ける事で正常な働きをするやつがあるからな。筋肉にダメージが入らないから徐々に衰えるという最悪な展開になるし。

そして得たモノは『あり得ない魔力の才能』だ。

カミ：この人バカですよね？

悪魔：少なくとも才能をオンオフ出来るとは聞いた事がない。まあ隠せばいいだけなのだが。

む!! 人間のパーティーと魔族の集団が戦っている!! 可愛い娘がいる人間パーティーを魔法で助けよう!

「魔法ビーム!」

悪魔：駄目だこいつ。

カミ：このネーミングセンスは頂けませんね。

ちッ!? 避けられたか。やはり才能だけで努力しないとこんなものなのか。

カミ：むしろネーミングセンスを努力してください。

悪魔：問題はそこじゃない。地雷を踏んだ事だ。

人間パーティーは此方に気付いて

「人間の姿をした魔族だど!?」

え？

「危険だ殺せ!」

「二殺せ殺せ殺せ!!!」

な、なんで!? 何で襲ってくるの!?

カミ：それはこの世界の人間は魔法を使えないからです。

悪魔：つまり魔法を使う〓魔族〓敵なんだよ、この世界の人間にとっては。

カミ：誰もいない場所で使えば良いので、地雷を避ける事は簡単だったのですがね。信頼関係も無いままに思いつき地雷を踏みましたものね。

「魔法ヲ使ウ狂戦士ダト!」

「危険ダ殺せ!」

「二殺せ! 殺せ! 殺せ!!!」

こっちも!?

悪魔：そりやお前、人間だし。魔族にとっては人間〓狂戦士〓敵だ。カミ：加えて人間の身体能力は高めに設定しています。種族としての才能は魔族と人類で同じくらいです。

矢だ!?!やだ!嫌だー!魔法も嫌だー!

誰か助けてゝ!?!死ぬー!死ぬー!ー!

「殺せ殺せ殺せ殺せ!!!」

「殺せ殺せ殺せ殺せ!!!」

カミ：人間ではあり得ない魔法の才能ですが、魔族からすれば平均的魔族のそれと同程度なので、彼は助かりますかね？これは見ものですよ。

悪魔：世界の確認を怠^{おこた}ったあいつが悪いな。

手で触れた物質を破壊する能力（タイミング任意）

チュド——ン!!!

カミ：うるさいですね。何処のおバカさんですか、こんな事をするのは？

悪魔：地雷つつうか、核地雷を与えた奴のセリフじゃねえよ。

カミ：おや？悪魔さんはアレが何か知っているのですか？

悪魔：あれだあれ。物質を破壊する能力。

カミ：ミダス王とは違って任意でオフにできますので、暴走しませんよ。

悪魔：触れたものを金にする能力で、飲み物も食べ物も金になったあれだな。神話における代表的な地雷能力。

それはおいといて、どつちかというと、任意の段階までに破壊を抑えないと駄目だろ、あの能力。

カミ：おや？やはりわかってしまいましたか？

悪魔：最初から『核』地雷って言ってんだろうが。E=MC²乗。

空気の原子を破壊してエネルギーに変換、一種の核爆発だろうが。敵に触れてから発動しても核爆発するけどさ。むしろ質量が増えて威力があがる。

カミ：古くからテイル○ウエイトという呪文もありますから、殊更特殊という訳でもありませんよ。

ゼロ距離テイル○エイトフィンガーは強そうですね。

悪魔：あつちは放射線がでないで敵にだけダメージを与えるクリーンな呪文、此方は敵も味方も巻き込む自爆技。全然違うわ。

あと何気に恐ろしい技を開発すんな。

カミ：握壊の術式はこんな技だと思っていたのですが、どうなんでしょうね？

悪魔：流石にそこまで威力はねえよ。あと自爆もしねえよ。

カミ：そういえば、メガ○テは何故味方を巻き込まないんでしょうか

ね？

悪魔：そういうゲームだからだよ！

チュド——ン！！！！

チュド——ン！！！！

チュド——ン！！！！

悪魔：……なあ、何人にこの能力を与えたんだ？

カミ：ざつと100人くらいですかね？大人気でした。

悪魔：多過ぎじゃない！放射線がヤバイ！

カミ：放射性物質を生成する訳ではないので安全ですよ。瞬間的なものですから。

悪魔：そういう問題か!!

チュド——ン！！！！

悪魔：そういえば気になるヤツがいるんだが。

カミ：露骨に現実逃避する悪魔さんとは珍しいですね。どなたでしょうか？

悪魔：能力なぞいらない、今のままの自分でいいと言ったヤツがいただろ。

カミ：いましたね。

悪魔：……なあ、どっちの発言を受けたんだ？いらないのか今のまなのか。

カミ：ちゃんと今のままで『神のルールから外れる能力』と『神のルールから外れる能力を伝播させる能力』を維持したまま送りましたよ。その代わりにフィジカルをこの世界の人間平均までブーストできなかったたので弱いし、言語も通じないから苦労するでしょうが。

悪魔：この世界のコンセプトからすると問題ないか？

カミ：意図的に『魔力を持たない人と魔力を持つ魔族が争う事』を私

が義務付けた世界だからですか？それらが解消されて後々には平和
になっている可能性もありますね。まあ伝播スピードにもよります
が、100年200年では無理でしょう。彼も自身の能力を知らない
でしょうし。

悪魔：最初から平和にしろよ。

カミ：悪魔さん悪魔さん。平和とは勝ち取るものなのですよ。与えら
れた平穏を貪るような愚民を私は必要としません。

チュド——ン!!!

悪魔：五月蠅^{うるさ}いから、もうその能力を与えるの止めないか？
カミ：それもそうですね。

チュド——ン!!!

あらゆるダメージを一瞬で回復し続ける能力

カミ：うーん。

悪魔：便秘か？

カミ：どうしてそうなるんですか？悪魔さん。

悪魔：お前が他人の事で悩むなんてあり得ない。まず間違いなく自分の事で、加えてどうでも良いことだ。

カミ：半分正解で半分誤りです。

悪魔：つまり、どうでも良いことか。

カミ：どうでもいいと言えぱいいんですけどね。

悪魔：煮え切らない態度だなあ。

カミ：知つての通り、私は与えた特典で絶望する様を見るのを愉しむのが趣味です。

悪魔：愉しむ……人には理解できない楽しみなのな。まあ理解したくもないから納得だが。で？

カミ：地雷になるはずの能力で楽しめたら、私はどういう顔をすればいいのでしょうかねえ？

悪魔：どういう意味だ？

カミ：百聞は一見に如かずと言いますから、彼を見てください。VT Rスタート

俺は盾持ち。要はパーティーの先人に立ってダメージを受け止める役目だ。ファンタジー世界に転生したからには直接戦うより、こういう役割をしたかったんだ。

悪魔：アタッカー以外に成りたがるとは珍しいな。

カミ：珍しいのはそこではありませんよ。

悪魔：？

これは炎の魔法か？熱熱熱い！しかし火傷から回復。

そしてこれは石の槍か？グワツ！腹に突き刺さった！けど死なない！痛いがそこからでも回復！

な!? 突き刺さったまま回復した!? 痛い痛い! 痛みが継続している
!?

カミ：コンセプトとしては回復するけど痛みは感じるというものです。あと、回復する時も痛みを感じますし、今回の様に異物が体内に入ったまま回復すると痛みは持続します。

通常は痛覚がオーバーフローを起こして痛みを遮断しますが、感覚器へのダメージなのでやはり回復します。

悪魔：致死ダメージから回復するが、衰弱はするから一応寿命では死ねるな。それまで苦しむだろうが。まあ予測できたが。とりあえず痛いだろうが、抉り出せば回復する。予測通りだろ？

カミ：ええ。ここまではそうでした。

悪魔：？

痛い痛い! 痛みが――!

気・持・ち・いい――!

悪魔：……………は？

ああ、ああ、いい。いい!

さあ攻めてくれ! 我に痛みを!

痛みを!!

痛みを――!!!

悪魔：…………え？つと？理性が壊れてるのこれ？ハアハアとイッテるし顔もヤバい事になってるぞ。

カミ：いえ、精神的なダメージも回復するので、信じたくありませんが正気のままです。

悪魔：どゆこと？

カミ：彼は素^{もと}から痛めつけられるのが好きな超のつくマゾです。

悪魔……俺は……いったい……どういう顔をすればいいんだ？
カミ：でしょ？

さあ何処だ？俺に絶頂を与えてくれる強い奴は何処だ？俺は逃げも隠れもしないりだから攻めてくれ！

カミ：とりあえず、違う人を見ましようか。
悪魔……だな。

ちよつと待て魔族。何故逃げる？あと仲間も何で逃げてるんだ？
俺を1人にしないで。

番外編

番外編

カミ：という訳で、貴方にはドラゴンに変身する能力を与えましょう。
拒否権はありません。

「すいません、いきなりでわからないので最初からお願いします」

カミ：わかりました。

カミ：貴方は死にました。

別の世界に主人公として生まれ変わります。

特典はドラゴンに変身する能力です。

「頼んでないのに三行での説明ありがとうございます。」

けど、なんでドラゴンに変身する能力なんですか？」

カミ：私の中のトレンドです。

「いや、こういうのって僕が選ぶとかいうのがトレンドじゃないんでしょうか？」

カミ：図々しいですね。私のミスでもないのに、なんでそこまで気を使わなくてはならないのですか？

「え？じゃあ何でそんな能力をくれるんですか？」

カミ：私のトレンドです。

「ダメだ、話を通じているようで通じてない」

カミ：それが私のトレンドです。という訳で貴方には私のトレンドであるドラゴンに変身する能力と連動してここでの記憶を持って、こことは別の私のトレンドである世界に生まれ変わってもらいます。転生先では質問を受け付けませんから、今のうちにお願ひします。以上、私のトレンドです。さて、この会話で『とれんど』を何回言ったでしょう？

『と、連動』が入っているからトータル6回。問題提出除いて5回」

カミ：数えてたのですか。暇な人ですね。

「あんたに言われたくない！」

カミ：という訳で質問をどうぞ。

悪魔：必要ならアドバイスもするぞ。

「誰が悪魔の言うことに耳を傾けるか！」

カミ：損な人ですね。

悪魔：言いたい事はあるが、今回は黙っとく。

「うーん。じゃあ、ドラゴンに変身したら心もドラゴンになって理性が飛ぶとかありますか？」

カミ：勿論、理性を飛ばします。

「要りません、そんな恐ろしい能力」

カミ：仕方ありませんね。じゃあ、理性はキープさせましょう。

「それじゃあ、変身したらどうやって人間に戻るの？一定時間とか僕が決めたタイミングとか」

カミ：人間には戻れません。

「要りません！そんな能力要りません！」

カミ：仕方ありませんね。気絶、又は貴方の任意のタイミングで人間に戻るようにしましょう。

「あ、だいたいわかってきた。つまり、ドラゴンに変身するけどその時の大量のペナルティをこの説明で僕が指摘しない限りつくって方針なんだ」

カミ：その通りです。なかなか見所がありますね。

「じゃあいいらない。そんな能力いいらない。」

「だいたい、僕が変身しなかった……ひよつとして強制に変身する条件とかあったりする？」

カミ：変身するタイミングは貴方が満月を見た時か、瀕死になった時、或いは貴方が変身したいタイミングです。

「ちよつと待って！僕が何も指摘しなかったら、うっかり満月を見たら死ぬまで理性を失ったドラゴンになってた訳！」

カミ：よくわかりましたね、その通りです。

「いいらない！そんな能力いいらない！」

カミ：能力の拒否は認められません。

「僕が何か悪い事をしたのか!」

悪魔：あえて言うなら、親より先に死んだ事だな。

「お前は黙れ!」

カミ：損してますよね、本当に。

悪魔……

「じゃあ変身のタイミングは僕の任意だけにして!」

カミ：それは駄目ですよ。それを認めると貴方は変身をしなくなりま
すよね。

「くっ!じゃあ、瀕死になった時に勝手に変身するのはいいけど満月
はいらない!」

カミ：わかりました、それは認めましょう。

悪魔：同じ変身しないといけない条件なら、一月に一定時間変身しな
いと発狂するとかのペナルティを付けた方が制御しやすく安全な
んだが、好みの問題か)

「じゃあドラゴンのサイズは?重量を教えて」

カミ：変身時の貴方と同じだけの重さです。

悪魔：(そういう事か)

「軽!それで体積がでかかったらほとんど空気になるじゃないか!」

カミ：体積は20倍です。

「何処の風船ドラゴンだよ!体積に見合った体重に……やっぱり体重
に見合った体積にして!」

カミ：構いませんがどうしてですか?

「体積に見合った体重だと自分の重さを支えきれないじゃないか!」

カミ：では、変身後の体重は貴方の体重と等量とし、体重に見合った
体積にします。

悪魔：(なかなかやるな)

「変身する時にカロリーを大量消費してガリガリになるとか、炎のブ
レスのカロリーでガリガリになるとか無しで!普段の基礎代謝が良

すぎて直ぐにカロリーが切れるとかもなし！体質も硬くして！鱗が人の爪と同程度の防御力とかなしで！」

悪魔：（爪と鱗は同じようなもんだから着眼はいいな）

「あと人間の筋力基準で空を飛べないとかも無し！変身したら能力を向上させること！」

カミ：わかりました。それらの要求は受け入れましょう。こんなものでよろしいでしょうか？

「えーと、えーと……」

カミ：無いようですね？では、良い来世を。

「いや、ちよつと待つて待つ……」

カミ：ふう。強敵でした。

悪魔：なかなかやるけど、1つ聞くべきものを忘れてんな。

カミ：おや？じゃあ何故助けなかったんですか？

悪魔：まあそれくらいなら別にいいかなと思ってな。

「……起きて、起きて」

ベッドの上で股がりつつユサユサ揺らして幼馴染は僕を起こしている。ピンク色の髪（地毛）という前世ではあり得なかった色だ。

「お前、もう少し普通に起こせ」

年頃の少女が男に対してする動作ではない。

「むー、リュウが起きないからいけないんじゃない」

プクプクと膨れながら言ってるが、

「いや、普通に目覚まし時計で起きれるから」

だから何でこの娘は目覚ましを止めて起こすんですかね？まあいいや。

「とりあえず着替えるから部屋から出ていけ」

「はーい。朝ごはんが覚めるから早くしてね」

「はいよ」

さて、ここらで纏めよう。

僕の名前はリュウ。神からドラゴンに変身する能力を持った少年だ。

さつきまでいたのは幼馴染。毎朝僕を起こしにくるあざといやつだ。

今、父親は海外に単身赴任で母親もそれについていった。なので家には僕1人。

なので心配だからとお目付け役に毎朝やってきています。そして今日は平日、これから彼女の朝ごはんを食べて高校に行く。

さて、そろそろ声を大にして叫んでいいか？

「ラブコメの世界で、

何のために、

ドラゴンに変身する能力を使うんじゃないか！」

カミ：仮面ライダーとかのバトルになれば使えるんじゃないでしょうかね？

悪魔：つうても、この世界はそんな世界でもない、本当にバトルのなただのラブコメ世界なんだよな。

カミ：これで彼が適当にしていたらゴジラになってましたからね。理性が飛んでいたら科学を無視した増量をさせて、大暴れさせられましたのに。

悪魔：やつぱり後出しで被害が最大になるように能力を変更する予定だったか。